

# 広がる胎児治療

検査で分かった胎児の病気を、母親のおなかの中にいる間に治す。そんな「胎児治療」が広がりつつある。放っておくと子宮内で亡くなったり、出産後の治療では手遅れになったりするリスクがある小さな命。保険が適用される治療もあり、救える機会が増えてきた。

(教運孝匡)

## 生殖医療 命が始まるとき

津山市の主婦北村唯子さん(36)は昨年、体外受精で双子を妊娠した。妊娠26週目、片方の胎児がもう一方の胎児を

圧迫するように大きく育っていることが判明。詳しい超音波(エコー)検査の結果、胎児が双胎間輸血症候群(TTTTS)だと診断された。胎児2人は母親の胎盤を共有し、血管をつながっている。TTTTSとは血流バランスが崩れ、片方の胎児からもう一方の胎児に多量の血液が流れ込んでしまう病気。血液を送

り出す胎児は羊膜内の羊水が少なくなり、貧血や発育不全を起す。血液が流れ込む胎児は羊水が増えすぎ、心不全などになる恐れがある。北村さんは医師から「このままでは両方の胎児とも危ない」と告げられた。治療に臨むことを決め、川崎医科大学附属病院(倉敷市)で緊急手術を受けた。母親のおなかに小さな穴を開け、内視鏡で行う。胎児2人がつながる胎盤の血管をレーザーで焼き固め、胎児間の血液の行き来を止めるのだ。

## 診断技術が進歩 副作用・効果見極め必要



TTTTSの胎児治療を経て出産した双子の姉妹を見守る北村さん (津山市)

2時間半の手術は成功。北村さんはことし1月、自然分娩で女の子2人を出産した。2カ月後に1回の受診を続けているが、姉妹は順調に育っているという。北村さんは「おなかの中にいる段階で治療できるなんて、すごい時代のおかげで2人を抱けました」と感謝する。

### 「有効性高い」

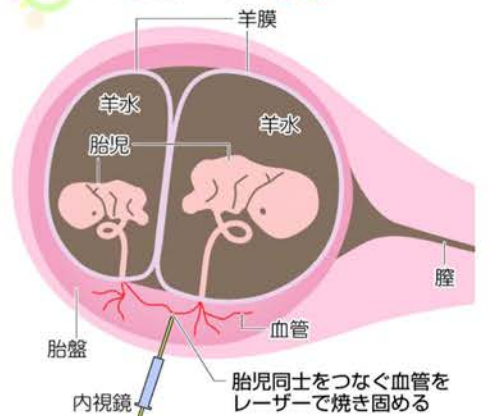
同病院産婦人科の村田晋医師(38)は「TTTTSは治療に当たれる胎児疾患の中でも発症頻度が高く、治療の有効性

も非常に高いものです」と強調する。村田医師によると、TTTTSは一卵性で胎盤も一つしかないタイプの双生児の約1割に起きる。放っておくと、胎児2人も死亡する確率は80〜90%。以前は母体のおなかに針を刺して羊水を抜く対処法しかなかったが、それをして50%の確率で胎児は2人も亡くなる。この母子が受けたようなレーザーで胎児の血管を焼き固める手術は、2002年に国内で導入。12年に保険適用となった。現在、全国10施設で



「TTTTSの手術は、今ある胎児治療の中でも有効性が非常に高い」と語る村田医師

### TTTTSでのレーザー手術



年150〜200件行われている。70%以上の確率で胎児2人ともを救え、90%以上で少なくとも1人は助かるという。

### 母体リスク減

胎児治療に取り組む医師たちでつくる「日本胎児治療グ

同グループの責任者で、国立成育医療研究センター(東京) 周産期・母性診療センター1長の左合治彦医師(58)は「内視鏡の普及で手術時の母体リスクが軽減されたことや、エコーなど診断技術の発達により早い段階で胎児の病気が分かるようになったことが、胎児治療の進展を後押ししたといえます」と説明する。

ただ、どんなケースでも常に胎児治療が最良の選択というわけではないという。治療による母親への副作用に加え、胎児の状態によっては治療効果が期待できない場合もある。左合医師は「母子とも後遺症なく生きていけるようにするのが、胎児治療の目的。母体と胎児の状況を的確に見極め、是非を判断する必要がある」と話している。

### 国内での主な胎児治療

疾患名	治療法	現状
双胎間輸血症候群(TTTTS)	レーザー手術で胎児の血管を焼き固める	保険適用
胎児胸水	胎児の胸と羊水の間に管を通す手術	保険適用
胎児頻脈性不整脈	母親への薬剤投与で胎盤を通じて胎児を治療	臨床試験中
先天性横隔膜ヘルニア	バルーンで胎児の気管を一時的に塞ぐ手術	一部医療機関で実施